ギャスケルのヒロインと病い

木　村　晶　子

序

ヴィクトリア朝小説に多くの病いの描写があることは、身体論等の観点から近年注目されている。西欧において、病人という概念が現在の形で規定されたのは、十八世紀から十九世紀と言われるが、ヴィクトリア朝では特に健康や病気に対する関心が高まり、小説においても、病いの意味が、現代とは異なる形で重要なものだったようである。ギャスケルの小説においても、病いが、作品の重要な場面となったり、プロットの要となったりしているように思える。本論では、殊に、長編のヒロインを病気との関わりという点からとらえることによって、ギャスケルの女性像について考えてみたい。

1．ヴィクトリア朝と病い
～『メアリー・バートン』と『北と南』

初めに、ヴィクトリア朝においては、現代とは比較にならぬ程、人々が病気の危険にさらされていたこと、またその中で、ギャスケルが、特に産業革命による都市化や工業化の暗黒面としての病いに敏感だったことを見てゆきたい。労働者と資本家の対立を軸にした処女作『メアリー・バートン』と『北と南』の二つの作品の舞台となり、また、ギャスケル自身が牧師の妻として生活した都市マンチェスターは、エンゲルスが、「この世の地獄」と形容した程、劣悪な環境だったと言われている。[1] マンチェスターの当時の平均寿命は三十五歳、労働者に至っては、三分の一から二分の一の子供が五歳未満で死亡する程の高い幼児死亡率のため、僅か十五歳だったと言う。[2] 過酷な労働、長い労働時間、貧困による栄養不良、不衛生な居住環境は、病気を蔓延させ、更に伝染病が次々と体力の弱い乳幼

児から命を奪っていった様子は、『メアリー・バートン』のウィルソン家の双子や、ダヴェンポートらがチフスで次々と亡くなる場面でも描かれる通りである。

> 'The fever' was (as it usually is in Manchester), of a low, putrid, typhoid kind; brought on by miserable living, filthy neighbourhood, and great depression of mind and body. It is virulent, malignant, and highly infectious. But the poor are fatalists with regard to infection; and well for them it is so, for in their crowded dwellings no invalid can be isolated. (MB., c6)[3]

「伝染病に関しては、宿命論者にならざるを得ない」程の絶望的な状況こそが、ジョン・バートンを、善良な一労働者から、過激な労働運動の闘士、ひいては殺人者へと変貌させたとすら言えるだろう。実際、英国の1830～40年代は、まさに伝染病の時代だった。1831年のコレラの上陸により五万二千人の死者が出た後、インフルエンザが猛威をふるい、更に"new fever"と呼ばれたチフスが1837年頃から大流行、その後四年間は毎年一万六千人の患者を出し、1846年にはじゃがいもの凶作による飢饉で英国の都市に流入してきたアイルランド労働者と共に、より重い型のチフスが広がり、『メアリー・バートン』出版の前年1847年までには、死者が三万を超えたとされる。その他にも、天然痘、しょう紅熱による万単位の死者が出て、病原も治療法もわからぬまま、インフルエンザがチフスの合併症とされたりし、当時の"fever"という言葉が多くの伝染病の総称とされたのも頷けるのである。[4]

伝染病以外にも、マーガレットの失明、エスターのアル中、アリスの卒中等、『メアリー・バートン』には、様々な病いがみられるが、『北と南』でも、悲惨な労働者の現実を反映するものとして、紡績工場で羊毛や毛糸の屑を吸って胸を患うベッシー・ヒギンズの死が描かれている。

> 'I think I was well when mother died but I have never been rightly strong sin' somewhere about that time. I began to work in a carding-room soon after, and the fluff got into my lungs and poisoned me.'

'Fluff?' said Margaret, inquiringly. 'Fluff,' repeated Bessy. 'Little bits, as fly off fro' the cotton, when they're carding it, and fill the air till it looks all fine white dust. They say it winds round the lungs, and tightens them up. Anyhow, there's many a one as works in a carding-room, that falls into a waste, coughing and spitting blood, because they're just poisoned by the fluff. (NS., C.13)[5]

少女や子供の労働力を多用した紡績工場では、こうした糸屑や、紡錘機から飛散る水を絶えずかぶることから、感冒や胸部疾患が多発し、「白いペスト」と恐れられた結核を引起こすのも珍しくなかったそうである。[6] 医師を呼ぶことすらできない労働者の病いとは違うものの、主人公の母ヘイル夫人も、病名は示されぬものの不治の病いにおかされる。ヘイル夫人は、虚弱で怠惰な典型的なレイディとして書かれているが、マンチェスターをモデルにした都市ミルトンの汚れた空気が死期を早めたことを思うと、単なる "lady's illness" を超えた、都市の病いの影を感じることができる。しかも、ヘイル夫人の病いは、ベッシーの病いと並行して進行し、主人公のマーガレットは、母の看護婦として、またベッシーの最愛の友として二つの病いに立ち会うことになるのである。以下、ヒロインと病いとの関わりに焦点を移してみたい。

2．病いの看護
～『北と南』と『シルヴィアの恋人』

ギャスケルの長編のヒロインの殆どは、病人を看護し、多くの場合、母親や母替りの人物が病人となっている。病人は、親子関係が逆転したかのように子供のようになり、ヒロインは、母親のようにいたわり面倒をみることになる。『メアリー・バートン』では、息子の殺人容疑での逮捕に呆然とするウィルソン夫人は、メアリーに、「自分はまるで、母親が病気で苦しんでいるのに何もできない子供のようだ」と嘆き悲しみ、卒中で倒れたアリス・ウィルソンも、意識を取戻しても子供にかえってしまう。『北と南』のヘイル夫人も、娘に頼りきってしまい、保護したり、いたわったり、決定を下したりするのは、全てマーガレットの仕事になるが、マーガレットは、必死で母の看護を引受けようとする。

'Oh, mama! let me be your nurse. I will learn anything Dixon can teach me. But you know I am your child, and I do think I have a right to do everything for you.'

'You don't know what you are asking," said Mrs Hale, with a shudder.

'Yes, I do. I know a great deal more than you are aware of. Let me be your nurse. Let me try, at any rate. No one has ever, shall ever try so hard as I will do. It will be such a comfort, mama.' (NS., C.16)[7]

『北と南』のマーガレットは、ギャスケルのヒロインには珍しく、自分は病気にならずに一方的に看護する立場の人物である。兄をかばうための嘘がソーントン氏に発覚した後、顔色が真っ青で震えていても、翌日には回復する強さをもつ彼女は、父母の相次ぐ死のショックにも寝込むことなく、悲しみを克服しようとする。知性や意志の強さもあるにしろ、最終的にソーントン氏の破産を救い、自分で人生を選択する、経済的に自立した唯一のヒロインであることと、彼女が病いに倒れることなく、ひたすら看護する側の女性であることは、無関係ではないように思われる。

『シルヴィアの恋人』のシルヴィアも、父が絞首刑になって、前年の病気がぶり返してしまう母親を献身的に看病する。ここでも、母親ベルは、精神的なショックから錯乱し、子供のようになってしまうが、シルヴィアが、チャールズを愛しつつも最終的にはフィリップの求婚を承諾する決心をするのも、まず病気の母親のためだったことを思うと、病人の看護がプロットの要にあるとも言えるだろう。ギャスケルのヒロイン達が親思いであることは、今更指摘するまでもないが、特に母親との関係が、こうした逆転した親子関係ともいえる、「看護する、看護される」ものであることは、ヒロインの力を示すものとして意味深い。

ヴィクトリア朝の女性にとって、病人の看護は、愛情や善良さの指標となる程、重要なものだったようである。当時の実践的道徳観からは、苦しみに同情するだけでは不十分であり、「家庭の天使」としての当時の女性の理想像も、病人の看護に必要な忍耐や思いやり、自己犠牲とぴったり合致するものだったに違いない。

しかし、M・ベイリンは、看護が、女らしい究極の自己犠牲である一方で、単なる女性的な行為にとどまらず、力を発揮することにより責任と権威をもたらす

ものだったと述べている。[8] また、家族以外の看護の場合でも、貧しい病人を看護することが、上流・中流の女性にゆるされた最も積極的な自己実現だったという指摘もある。ギャスケルのヒロインの場合も、逆転した親子関係における看護という形によって、当時の女性の枠組みをはずれることなく、家庭内で最も大きな力を発揮していたのではないだろうか。

3．ヒロインの病と回復

～『メアリー・バートン』、『シルヴィアの恋人』、『従妹フィリス』、『妻達と娘達』

ヒロインの看護する立場が重要である一方で、『北と南』を除く殆どのヒロインが、自ら病の床に伏し、看護される立場になっている。病名が特定されない病いの描写は、ヴィクトリア朝小説には珍しくないが、ギャスケルのヒロインも、ルースを例外として、死に至る伝染病ではなく、精神的ショックや過度の緊張が引金となって、命の危険にさらされる病いに倒れてしまう。

『メアリー・バートン』のメアリーは、父の殺人の罪を知りつつそのショックを隠し、愛するジェムの冤罪を晴らすためにアリバイを証明するウィルを探しにゆくという、当時の未婚女性にとっては、非常に大胆な行為の結果、病気になってしまう。精神的打撃が、まず肉体を襲うことは、父の罪を初めて知った後のメアリーの頭痛や眩暈（25章冒頭）でも明らかだが、彼女の病いは、当然引起こされるものとされながら、ジェムを救うまでは、持ちこたえねばならないという強い決意によって、ぎりぎりまで先送りされるのである。

> 'I'm not out of my senses; there is so much to be done－so much－and no one but me to do it, you know,－though I can't rightly tell what it is,' looking up with bewilderment into Mrs.Jone's face. 'I must not go mad what-ever comes－at least not yet. No!' (MB.,C.27)[9]

> 'I must not go mad. I must not, indeed. They say people tell the truth when they're mad; but I don't. I was always a liar. I was, indeed; but I'm not mad. I must not go mad. I must not, indeed.' (MB.,C.32)[10]

父の罪の衝撃に加え、それを秘密にしたままジェムを無実にせねばならないという相反する緊張こそ、メアリーの病いの原因であることは、'I must not go mad' の繰返しからも窺える。ウィルが裁判に間に合って到着し、ジェムは無実になるものの、最早メアリーは正常な知覚を失って錯乱状態に陥り、生死の境をさまようことになる。

心理的打撃が死の危険を招くほどの病いに直結することは、当時では自然だったようで、メアリーの病いも、『シルヴィアの恋人』や、『従妹フィリス』で言及される "brain fever" のように思われる。脳炎、脳膜炎と訳される "brain fever" は、当時は、神経症から肉体が衰弱し、死に至ることも珍しくなかった "nervous fever" に近く、1880年ですら、失恋や不安を原因として、不眠、悪夢、虚脱状態から消化器病を経て、最後にはチフスを起こすという説もあったという。

『シルヴィアの恋人』では、出産直後、熱のあるシルヴィアが、かつての恋人チャールズが生きている夢をみたと語って、夫フィリップに激しくなじられると、口もきかず麻痺状態になる場面にも見られる。激情を抑えるシルヴィアは、"brain fever" の寸前と診断され、医師は、夫の軽率さを責めるのである。幸いシルヴィアの病いは、快方に向かうものの、これ以後の夫婦の亀裂は決定的になる。

中編『従妹フィリス』のヒロイン、フィリスの場合も、恋の挫折が命に関わる重病を引起こす。病気の快復期に、空気の良いフィリスの村に滞在する鉄道技師ホールズワースと恋に落ちるフィリスは（ここでも、病いが物語展開に重要な役割を果たしているが)、彼が突然仕事でカナダへ行ってしまうために、顔色も悪くなってやせ細ってしまう。フィリスを妹のように愛する語り手ポールは、彼女を元気づけようと、ホールズワースが出発前に彼女と結婚するつもりだと語ったことを打明けるが、ホールズワースは、カナダで別の女性と結婚してしまう。そのショックで、フィリスは、落着かない眼差し、耳障りな話し方、夜中の徘徊等の心の病いの徴候を示すようになる。そして、ポールを責める父親に、恋をしていたことを告白した後、意識不明となって、やはり "brain fever" で生死の境をさまようのである。

シルヴィアも、フィリスも、内面の激しい恋心を口に出さず、その極度の抑制が、最早保てなくなった時、無理解な言葉で一気に病いが重くなってゆく。口に

出せない秘密が、大きな重荷になることは、ギャスケルの作品にしばしば見出だせるが、中でも特にヒロインの場合は、内面の激しい感情が、沈黙に閉込められたまま、肉体を通して表現されている。誰にも自分の思いを語らず、捨てられた悲しみや苦しみが、相手への攻撃にはならずにひたすら自分の肉体を蝕んでいく点で、フィリスの病いは、ヴィクトリア朝の女性の病気のひとつの典型と言えるかもしれない。

ギャスケルのヒロインにおいては、心の痛みが、肉体に直結し、肉体によって表現される点で、まさに病いは、語り得ない内面の発露となる。ここで注目すべきなのは、病いが、ある限度を超えた精神的負担や悲しみに対する肉体の言葉であり、肉体的苦痛の極点である一方で、逆に言葉にできなかった精神的苦痛からの解放となることであろう。肉体の崩壊でありながら、病いは、精神的苦しみからの解放と慰安をもたらす、ポジティヴな機能を持つのである。

M・ベイリンは、肉体と精神を結ぶ言葉としての病いが、十八世紀から十九世紀において重要になったとし、ヴィクトリア朝の福音主義による、肉体の苦痛や病気の理想化の影響があったと述べている。更に、関係性を主要な構成要素とするヴィクトリア朝小説において、病いが必然的にもたらす患者の孤独や病室という場での隔離と、看護という密な関係が、根源的な private なものと、public なものとの関わりを表現する最適の方法となったこと、その結果、病室が、慰安の場、愛情の再確認の場として、牧歌的サンクチュアリだったことも指摘している。[11] また、D・P・ハーンドゥルは、十九世紀における、精神を男性的なもの、肉体を女性的なものとするイデオロギーや、ヴィクトリア朝の弱くて繊細な女性像、消費する一方の存在としてのブルジョア的女性像が、女性の病いと合致したこと、病いが、家庭の夫人や母親にとっての数少ない休息の場やバースコントロールの手段ともなったことを論じている。[12]

現実に、当時の体を締付ける衣服、女性の体に対する知識の欠如、それによる不衛生や栄養不良や運動不足は、女性の病いを増加させたに違いない。女性の方が、遥かに弱い神経をもっているという考えが強まったのは十八世紀頃からだといわれるが[13]、十九世紀には、更に、弱き性としての女性が、病める性としての女性になったということもできるだろう。

しかし、先に述べたように、病いは弱さの極限である一方、社会的に封じ込め

られた自我の表現ともなり、また、その病いに立向かうことが逆に、強さの指標ともなったことも確かだろう。生命の危機でありながら、あるいは、あるゆえに一層、病いを克服することは、過去の苦しみや悲しみを克服し、新たな生命力を獲得する最大の契機となるのである。

ギャスケルのヒロインにおいては、殊にその傾向が強いように思える。自己抑制がヒロインの大きな美徳となるギャスケルの作品において、人格の変化や成長は、例えば『ジェイン・エア』のような他者との激しいぶつかり合い、対立、闘いといった、ダイアローグの世界を通してではなく、病いという、個人の世界での肉体と精神の極限の葛藤を通して達成されることが多いのではないだろうか。

例えば、『メアリー・バートン』のメアリーは、病気の快復期に、「生まれたての赤ん坊のように」無邪気で敏感な精神状態となる。カーソンの息子と軽薄な恋の夢をみたメアリーは死んで、純粋無垢な乙女として、生まれ変わるのである。

> She, for her part, was softer and gentler than she had ever been in her gentlest mood; since her illness, her motions, her glances, her voice were all tender in their languor. (MB.,C.34)[14]

また、『従妹フィリス』では、フィリスは、病後もふさぎこんでいるが、使用人のベティーに諭された後は、自分から、ポールの家に滞在して気持ちを新たにしようと決心する。

> 'Only for a short time, Paul. Then — we will go back to the peace of the old days. I know we shall; I can, and I will!' (CP.)[15]

作品はここで終るが、'I can' から 'I will' へのフィリスの意志は、新しい人生の門出ともいえる、希望に満ちたものに違いない。

『妻達と娘達』のヒロイン、モリーも、シンシアの代りにプレストンと密会したことを誤解され、町の人々に中傷されるが、病気になってからは、人々も過去を忘れてしまう。

All the Hollingford people forgot that they had ever thought of her except as the darling of the town; and each in his or her way showed kind interest in her father's child. (WD.,C.LIV)[16]

病気は、モリーの過去（実はモリーに非はないのだが）を清め、彼女の本来の魅力を呼び戻す働きをするのである。更に、回復したモリーは、ロジャーが驚く程、美しく成熟して、幸福な結末にふさわしいヒロインとなる。

He had heard that she was staying at the Towers; but he was almost as much surprised by her looks, as she was by his unexpected appearance, for he had only seen her once or twice since his his return from Africa, and then in the guise of an invalid. Now in her pretty evening-dress, with her hair beautifully dressed, her delicate complexion flushed a little with timidity yet her movements and manners bespeaking quiet ease, Roger hardly recognized her, although he acknowledged her identity. He began to feel that admiring deference which most young men experience, when conversing with a very pretty girl: a sort of desire to obtain her good opinion, in a manner very different to his old familiar friendliness. (WD.,C.LVIII)[17]

それまでの、友達や妹のようなモリーへの思いが、恋へと変化するのは、まさに、モリーが病気を経たことで、女性として成長したからといえるのではないだろうか。

ただ、『シルヴィアの恋人』の場合は、病いを通してヒロインが、成長、変化することのない例だろう。シルヴィアが、夫フィリップの本当の愛を知り、人をゆるすことを学ぶのは、最後の彼の死の時点であり、「青白く悲しそうな」まま、早く亡くなったと噂される彼女の結末は、病いが肯定的な機能を果たさなかった面から考えても意味深く思える。

4．病いと看護とヒロインの死
～『ルース』

しかし、何と言っても、ギャスケルのヒロインの中で最も病いと深く関わっているのは、『ルース』の主人公、ルースであろう。以下、ルースと病いとの関係を考察して、本論のまとめとしたい。ベイリンによると、『ルース』で書かれる病いの数は、ヴィクトリア朝小説の中でも最も多いとされるが[18]、確かにこの作品空間は、病気に満ちているといえるだろう。ベリンガムに、もともと、ルースとは結婚する気がないとはいえ、彼が重病に罹ってしまうことが、ルースを捨てるきっかけになるように、病気が、物語展開の要となるばかりか、病気との関わり方が、個人の真価を明らかにする。

不道徳な物語と糾弾され、子女に有害な物語として焼かれさえしたことでもわかるように、ヴィクトリア朝のタブーをおかして未婚の母を描いたこの作品においては、ヒロインの擁護こそが、現代の想像を超えた切実な課題だったはずだ。病人の看護と、その結果としての死という、病いを通じた究極の自己犠牲こそが、ヒロインの最高の擁護となっているのである。

ここで、注目したいのは、ルースが、単なる「家庭の天使」として、家族を看護するのではなく、職業として病人の看護を選択することである。当時の "sick nurse"、プロの看護婦は、lady のすべき仕事ではなく、下級の召使の労働と同じものと見なされ、敬遠されていたという。先に述べたように、看護が女性の美徳を発揮する理想的な仕事であっても、それを職業とすることは、また別問題だったのである。(因みに、ギャスケルが、フローレンス・ナイチンゲールと知合ったのは、『ルース』が完成した二年後だが[18]、 "sick nurse" を価値ある女性の専門職としたのが、ギャスケルと親交のあるナイチンゲールであることも興味深く思える。)

実際、ジャミーナは、ルースが看護婦となることを聞いて、次のように反対する。

> 'You, a sick nurse!' said Jamina. • • • 'My dear Ruth, I don't think you are fitted for it!' • • • 'It was not in that way I meant you were not fitted for it. I meant that you were fitted for something better.

Why, Ruth, you are better educated than I am!' (R., C.29)[19]

それでも、ルースの意志は固く、看護婦となったルースの美徳とその静けさは、慰安をもたらし、多くを語らないでも神の道へと人々を導くこととなる。未婚の母という不道徳な女としての烙印を押されたルースは、次第に人々の尊敬を勝ち取ってゆくのである。

『ルース』は、ギャスケルの作品の中でも、過度のセンチメンタリズムを批判されがちな小説だが、現代の物差しでこの作品を計ることは、あまり意味がないように思える。ここでは、未婚の母を扱って、公私の価値のズレ、つまり、世間の尺度と個人の内面的価値の隔たり、また、ひいては世間の尺度と神の尺度との隔たり、そして後者の正しさと真実が訴えられており、ヴィクトリア朝の道徳観に、ある点では迎合し、その道徳観の枠組の中にとどまりつつ、そうした枠組そのものの貧しさが浮彫りにされている。ギャスケルは、エミリー・ブロンテのように、世間と隔絶した絶対的価値の世界への翼も持たず、シャーロット・ブロンテのように、作品世界での反逆精神すら持ち合わせていなかったかもしれないが、ギャスケル自身の人生同様、社会の一員としての役割を軽視せずに、むしろそれを最善の形で全うする中で矛盾に立向かった点で、稀有の存在だったように思える。『ルース』は、まさに、そうしたヴィクトリア朝社会の内部に身をおきつつも、その社会の根底にある価値観を揺さぶるという危うい作業を成し得た作品ではないだろうか。

その危うく、困難な作業のために、ルースは、看護婦として、愛したベリンガム以外にも多くの命を救う必然性があり、更に自らも看護の中で伝染病に感染して死ぬ必要があったに違いない。ルースは、看護婦という職業の中で、死に日々接し、独特の神秘的な雰囲気を持つ者として畏敬の念を抱かれ、最終的には聖女として崇められるに等しい存在となる。ここには、最早、病いを克服しての成長ではなく、肉体の敗北が、精神の勝利と解放に通じる、病いの究極の形が描かれている。病いが、不幸の源である一方で、日常から人を引上げ、肉体と向い合うことで、究極の個の闘いとしての気高さを持ち得るとすれば、まさに、ルースの病死は、その極限をあらわしたものだっただろう。

ギャスケルのヒロインと、病気との関わりを見てゆく中で、ヒロインが病いを

通して、肉体の言葉で語っていたものの大きさを改めて思いつつ、本論を結びたい。

注

1) Michael Wheeler, *Heaven, Hell and the Victorians* (Cambridge :Cambridge U.P.,1990) p.198.

2) 立川昭二『病気の社会史』日本放送出版協会 1971
Bruce Haley, *The Healthy Body and Victorian Culture* (Cambridge:Harvard U.P.,1978)

3) Elizabeth Gaskell, *Mary Barton*
(New York:AMS Press, 1972), p.67.
以下、本論のギャスケルの作品の引用は全てこの版による。

4) Haley *op. cit.*,pp.6-11.

5) Elizabeth Gaskell, *North and South* p.118.

6) 立川昭二 前掲書

7) Elizabeth Gaskell, *North and South* p.150.

8) Miriam Bailin, *The Sickroom in Victorian Fiction: The Art of Being Ill* (Cambridge: Cambridge U.P.,1994) PP.26-30.

9) Elizabeth Gaskel, *Mary Barton*, p.332.

10) Ibid. p.381.

11) Miriam Bailin, *op.cit.*

12) Diane Price Herndl, *Invalid Women: Figuring Feminine Illness in American Fiction and Culture ,1840-1940* (Chapel Hill and London: The University of North Carolina Press, 1993)

13) Dorothy Porter, Roy Porter, *Patient's Progress: Doctors and Doctoring in Eighteenth-century England* (Stanford: Stanford U.P., 1989)

14) Elizabeth Gaskell, *Mary Barton* p.406.

15) Elizabeth Gaskell, *Cousin Phillis*, p.109.

16) Elizabeth Gaskell, *Wives and Daughters*, p.683

17) Ibid. p.717.

18) Winifred Gérin, *Elizaqbeth Gaskell: A Biography* (Oxford: Oxford U.P., 1976)

19) Elizabeth Gaskell, *Ruth*, pp.384-5